

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25560303

研究課題名(和文) 中学校におけるいじめの発生と運動部活動の関連

研究課題名(英文) Bullying and sports club activity among Junior High school in Japan

研究代表者

高見 和至 (Takami, Kazushi)

神戸大学・人間発達環境学研究所・教授

研究者番号：50236353

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では全31校の中学生約1万名にいじめの現状を調査し、その発生と運動部活動との関連性について検討した。しかしながら、調査依頼の過程で調査用紙の中に「いじめ」の用語を使わないことや、自己報告式アンケートの集団実施という限界はあった。

運動部員の有無による比較を行った結果からは、運動部員がいじめの被害や加害を多く経験しているという事実は認められなかった。つまり、運動部活動がいじめの発生や悪化を助長しているとは言えない。さらに、いじめを制止した経験がある者は、運動部員に多い傾向が見られた。しかし、暴力被害が生起している場や相手からは、部活動が暴力被害を受ける場の一つになっていることが分かった。

研究成果の概要(英文)：The present study investigated bullying behaviors among Junior high school students in terms of comparison sports club member with others. Bullying related behaviors were classified as bully, victim, bystander, restraint, and support. Moreover, bullying situations were classified as left-out and schools participated in the study. They completed a survey by reporting the ignoring, teasing and abuse, light violence, serious violence, taking money and goods, and cyberbullying. Students (N=10175) from first to third grades in 31 frequency of bullying related behaviors they experienced during the second semester using a five-point Likert-scale. The sports club members had experiences of bully and victim as much as nonmembers. And the sports club members tend to prevent bullying by restraint and support. But Sport club was one of the occasions to cause somatic violence. It is suggested that improving bullying behaviors by using sports club activities might lead to prevention of bullying.

研究分野：体育心理学

キーワード：いじめ 中学生 部活動 運動部

1. 研究開始当初の背景

我が国の学校におけるいじめの認知件数は、文部科学省が毎年実施している「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」¹⁾で報告されているが、中学校におけるいじめの認知件数は、55、248件(前年度63、634件)となっており、前年からの減少傾向はみられるものの依然として高い件数が報告されている。この背景にあるのは「いじめがゼロの学校よりも、いじめを解決できる学校が良い学校である(池田,2014)」という方針のもと、各学校のいじめを見逃さない積極的な取り組みを実施している結果という肯定的な要因もある。しかしその一方で、近年になっていじめの原因が示唆される中学生の自殺が後を絶たず、最近公表された調査報告書では、いじめを受けた場や機会として運動部活動が指摘されている。以下に2つの例をあげる。

2013年7月 名古屋 2年生男子 自宅マンションから投身自殺

男子生徒は昨年五月以降、複数の同級生から「死ぬ」「うざい」と言われ、筆箱を投げつけられるなど苦痛が蓄積。所属していたソフトテニス部ではボールをぶつけられたほか、自殺の前日に先輩から「汚い」と「バイ菌扱い」されたことも重なり、「極限まで追い詰められた」と指摘。部活でのいじめは、顧問教員が事実を把握していなかったと指摘された。(東京新聞 2014年3/28朝刊)

2014年1月 山形 中1女子 新幹線にはねられ死亡

報告書では女子生徒が所属する運動部で「練習相手がいなかった」などと記され、いじめと見られる状況を確認。死後1か月の生徒アンケートでは、「練習相手がなくて孤立」「二人組で練習中に、女子生徒が取れないボールを投げるように他の生徒が指示した」という様子が確認された。(山形新聞 2014年3/29朝刊)

これらのケースからは、運動部活動の中にいじめが存在しており、自殺に至るような重篤なケースでは運動部におけるいじめが原因の一つになることが示唆される。しかし、これまでいじめに関する調査は多々あるものの、運動部活動との関連性から分析された報告は見当たらない。そこで、中学生におけるいじめの発生と運動部活動の関連性を検討するための基礎資料を、中学生を対象としたアンケート調査から得ることは、この問題の解決の一助となると考えられる。

2. 研究の目的

いじめに関する調査は多々あるが、部活動との関連性を検討したものは見当たらない。そこで、いじめに関する複数の行動の頻度について、できるだけ具体的にシンプルな方法

で問い、運動部員と他の生徒との比較を試みる。当然、自己記入式質問紙調査の限界はあるが、中学校で運動部に所属する生徒の、いじめを「された」「した」「傍観」「制止」「サポート」の行動頻度に差があるのかについて検証する。

3. 研究の方法

調査対象者と調査方法

3都道府県、10市町村の公立中学校、合計31校の中学生10、175名を対象とした。性別は、男子5186名、女子4989名で、学年構成は、1年生3442名、2年生3316名、3年生3417名である。平均年齢は13.71歳(標準偏差0.976、最少12歳、最大15歳)であった。

自己報告式、無記名のアンケート調査を実施した。まず、各地方自治体の教育委員会、学校長に調査内容を説明し、調査協力を依頼した。その際、研究倫理的観点からアンケート内容に指摘を求め適宜修正を加えた。調査の実施方法も、各学校側の指示に従う旨を伝え依頼した。その際、学校側で実施回収する場合には、他者の回答を見ない工夫と、回答中に教師が巡回して生徒に回答を見られる不安を与えないことを依頼した。最終的に全ての学校に調査用紙を配送、各学校側の裁量で実施したのちに返送されてきた。

調査時期は、2013年12月中である。調査の時期は学期末試験を考慮して各学校に一任した。つまり、本研究では第2学期中のいじめに関する行動について回答を求めていたが、第2学期終業直前の時期の経験は含まれていない。

調査内容

いじめに関する実証的研究の方法論上の課題として、調査の対象となる期間や実施時期の明確化に加えて、いじめをどのように定義し、どのような回答を求めたのか明示する必要性が求められている(滝,1992;下田2014)。そこで本研究では、国立教育政策研究所,2013)で用いられている説明文を一部修正した以下の文を質問紙の冒頭に掲載し、生徒のいじめに対する共通理解を試みた。

「みなさんにとって、学校の友だちは、生活の中で一緒に過ごす時間が多い人達で、一緒に遊んだり、勉強したり、いろんな活動をすることがあります。そのかなで、時には友だち関係がうまくいかずに、誰かから、いじわるをされたり、イヤな思いをされたりすることもあると思います。そうしたいじわるやイヤなことを、みんなからされたり、何度も繰り返されたりされることは、とてもつらいことです。また自分がやってしまったことをあとでとても後悔することもあります。これからみなさんに質問するのは、そうしたいじわるやイヤなことを、むりやり“された体験”や、反対に弱い立場の友だちにあなたが“した経験”についてです。」

次に本研究では、いじめに対する5つの行

動(された・した・傍観・制止・サポート)の第2学期中の経験頻度を回答させる方法を採用するため、まず多岐に渡るいじめの内容を中学生に分かりやすく提示する必要があった。そこで、いじめの種類を文部科学省(2014)が従来から分類しているいじめの態様に含まれ、国立教育政策研究所(2013)のいじめ追跡調査で用いられている以下の6つの内容を設定した。以下の説明文は「された」頻度を問う場合の受動態の表現である。

- ・仲間はずれ・無視:仲間はずれにされたり、無視されたり、陰で悪口を言われたりした。
- ・からかい・悪口:からかわれたり、悪口や脅し文句、嫌なことを言われたりした。
- ・軽度の暴力:軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりした。
- ・重度の暴力:ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりした。
- ・金品被害:お金や物を盗られたり、壊されたりした。
- ・ネットいじめ:パソコンや携帯電話で、嫌なことをされた。

この6つの態様に対して別々に回答させた。回答の教示文は、第2学期中のことについて以下のように問うた。

- ・された友達の誰かからどのくらいされたか。
- ・した:弱い立場の友達にどのくらいしたか。
- ・傍観:友だちの誰かが、されたり、したりしているところを見たり聞いたりしたが、何もせずに見て見ぬふりをしてしまったことがどれくらいあるのか。
- ・制止:友だちの誰かが、されたり、したりしているときに、それを止めさせようとして、何か言ったり、とめに入ったり、先生や大人に知らせたりしたことがどれくらいあるか。

回答の選択肢は、「ぜんぜんない」「今までに1-2回くらい」「1ヶ月に2-3回くらい」「1週間に1回くらい」「1週間に何度も」の5段階から選択させた。

「サポート」に関する行動は、いじめの被害者との関係性から援助行動にも差異があることが考えられることから、以下の3つに分類して第2学期中に「ある・ない」の二択式でそれぞれに回答させた。なお、サポートに関しては、6つの態様をまとめて、これらのことをされている学校の友達に対する行動の有無を質問した。

- ・あいさつ・声がけ:されている人に、自分から挨拶したり声がけをしたりした。
- ・慰め・励まし:されている人に、なぐさめたり、励ましたりした。
- ・進言・相談:されている人にアドバイスをしたり、相談を受けたりした。

さらに、上記の「軽度の暴力」「重度の暴力」をまとめて、これらの被害を受けたことがある者に対して、加害者(クラスメイト、部活動同級生、先輩、塾友人など12種類)機会(授業中、休み時間、部活動、登下校など6つ)場所(教室、トイレ、下駄箱、体

育館、グラウンド、部室、通学路、公園など19カ所)を提示して、該当するものすべてを複数選択させた。

その他、属性に関する変数は、学年、性別、年齢、所属する部活動名のみ限定された。

4. 研究成果

全対象者におけるいじめ経験の傾向

紙面の都合上、表による提示ができないので、簡潔な概要を述べる。被害経験「された」において1回以上経験している者が最も多かったのは、からかい・悪口で約40%が第2学期中にされた経験を有している。経験者の半数は、1-2回程度であるが、週に何回もやられていると回答した者が6.2%いて、週1回程度と合わせると10%を超えて6態様の中で最も多かった。次に経験者の割合が多かったのが仲間はずれの約35%だが、その多くは数回程度であった。しかし週1回以上約6%の者は毎週のように被害を受けている状況にある。軽度の暴力は、約20%の者が経験し、毎週被害を受ける者は6%弱存在している。重度の暴力になると、経験者は、約10%に留まっているが、月に2-3回以上の割合で継続的に被害を受けている者は4.3%いる。お金を取られたり所有物を壊されたりする被害、とネットいじめの経験者は10%に満たないが、1%弱の者は毎週のように被害を受けている。

いじめの加害「した」では、1回以上の経験者が最も多いのが、仲間はずれ・無視で約44%の者は、した側になっている。さらに約7%の者は毎週誰かを仲間はずれや無視していることになる。からかい・悪口でも約32%の者が回はしたことがあり、週1回以上の常習的な者は6.3%いる。軽度の暴力をしたことがある者は17.1%、重度の暴力では7.3%、金品対象が約3%、ネットいじめが3.7%であった。週1回以上の常習的な加害者は、軽度の暴力3.6%、重度の暴力1.4%、金品0.4%、ネットいじめ0.5%となっている。

友だちがやられたり、したりしているのに対して何もせずに見て見ぬふりをした「傍観」経験は、仲間はずれ・無視、からかい・悪口、軽度の暴力に対して経験の割合が高い。仲間はずれ・無視では約50%の者が傍観したことがあり、からかいや悪口の場面でも約40%、軽度の暴力では約30%の者が見て見ぬふりをしたことがある。さらに重度の暴力でも20%の者に傍観した経験がある。金品の被害やネットいじめでは経験有が10%程度で、傍観経験者は少なくなっている。傍観することが、週に1回以上あり、いじめに対する傍観が多くなっている態様は、仲間はずれ・無視で11.0%、からかい・悪口で10.4%、軽度の暴力で7.5%になり、重度の暴力でも4.8%が週に1回以上見て見ぬふりをしているという結果になった。

「制止」は、誰か友だちがされたりしたりしている場面で、止めるように発言する、

具体的に止めに入る、教員などの大人に通報して、いじめを止める行動である。一回以上制止したことがある者は、仲間はずれ・無視で約 27%、軽度と重度の暴力で 20%前後、金品被害やネットいじめで 10%前後になっている。月に 2-3 回以上、制止経験がある者の割合は、仲間はずれ・無視 7.5%、からかい・悪口 7.3%、軽度の暴力 6.3%、重度の暴力 5.8% で比較的近似している。金品被害やネットいじめになると、4%未満になった。

経験頻度の性差をクロス集計により検証したところ、24 のすべてで χ^2 値の有意水準は 5% を下回っており、性差の存在が認められた。しかしながら、統計的に有意な結果が得られた理由はデータ数の多さに起因するもので、実際の差異は、主に未経験者「全くない」の割合でいくつかで 10%前後の差異がみられた。「された」では、仲間はずれ・無視を 1 回以上された者が女子で 11%程多かった。軽度の暴力では、経験者が男子で約 12%多い。特に週に何回も受けている者は男子で 5%、女子で 1.1% という結果で、男子の被害が多いが女子の被害者もいることが分かった。重度の暴力では性差が明確で女子で 95% が一度も経験していないが、男子で約 86% と少なく、週に 1 回以上されたと回答した男子は 4.1% になり、なかでも週に何度もと回答した男子は 2.6% 存在している。週 1 回以上被害を受けている者は女子でも 1.1% おり、継続的に暴力を受けている生徒は男女ともに存在している。

「した」の性差は、仲間はずれ・無視を 1 回以上したことがある者は女子の方が男子よりも約 10% 多く、からかい・悪口では男子が 12% 程多かった。軽度の暴力、重度の暴力でも男子の割合が高いが、特に軽度の暴力で週に 1 回以上定常的に行った者の 80% は男子であった。また、重度の暴力でも男子の 12% が 1 回以上強くぶつかったり叩いたり蹴ったりという暴力をしているという結果が得られた。「傍観」は、仲間はずれ・無視の現場を一度でも傍観したことがある者は女子で 10% 多かった。同様に軽度の暴力と重度の暴力の傍観経験者は男子で約 10% 多かった。「制止」での性差は、軽度の暴力と重度の暴力で顕著に表れており、1 回以上止めた経験がある者は男子で約 10% 多かった。「サポート」での性差は、挨拶・声掛けとアドバイス・相談を行った女子が男子より多く、特にアドバイスしたり相談に乗ったりした者は男子より約 12% 多かった。そこで、経験率にこのような性差が認められたことから、以後の分析は男女別に行った。

運動部員と非運動部員の経験率の差異

表 3、4 は男女別に運動部員とそれ以外の非運動部員の経験頻度を比較したものである。ただし表中には χ^2 検定による統計的な有

意差が認められたもののみ掲載している。また、差異のみられる分布を示す調整済み残差の絶対値が 1.96 以上のセルの数値を太字にしてある。つまり、そこが分布に差のある箇所になるが、ここでも統計的な有意差はデータ数によるもので、分布自体に特に大きな差異はなかった。

表 1. 男子における運動部員と非運動部員の差 (運動部/非運動部): %

	未回答	ぜんぜんない	1-2回程度	月2-3回	週1回程度	週に何度も	χ^2 値
された からかい	-	58.7/60.4	22.7/18.6	7.1/8.0	4.0/4.5	7.4/8.5	10.28 p<.05
した 仲間はずれ	-	60.4/66.5	25.4/20.8	8.0/5.9	3.3/3.1	3.0/3.7	19.79 p<.01
した からかい	-	60.2/66.6	22.8/16.9	8.7/6.8	3.4/4.5	4.8/5.2	27.09 p<.01
した 軽度の暴力	-	73.6/79.2	15.7/10.8	5.1/4.3	2.5/2.0	3.1/3.7	21.08 p<.01
した ネットいじめ	-	95.8/93.5	3.1/4.2	0.5/1.0	0.1/0.3	0.5/1.1	13.50 p<.01
傍観 仲間はずれ	14.3/13.4	41.7/44.3	25.0/22.8	9.1/8.0	5.0/4.5	4.9/7.1	13.20 p<.05
傍観 からかい	14.4/14.2	44.1/46.7	21.7/19.5	9.2/7.6	4.6/3.9	5.9/8.1	13.49 p<.05
傍観 軽度の暴力	15.3/14.9	49.7/52.6	18.5/14.5	7.4/6.8	4.1/4.8	4.9/6.3	14.28 p<.05
傍観 ネットいじめ	17.5/17.4	71.9/70.9	7.0/6.0	1.7/2.1	0.6/0.9	1.3/2.6	12.48 p<.05
制止 からかい	24.5/25.5	47.0/51.4	19.8/14.8	5.3/4.4	1.9/2.1	1.4/1.8	17.79 p<.01
制止 軽度の暴力	25.3/26.9	48.6/53.2	17.4/12.3	5.2/4.2	2.1/1.8	1.4/1.7	22.11 p<.01
制止 重度の暴力	26.9/27.6	49.5/53.4	15.5/12.4	4.6/3.1	1.9/1.6	1.6/1.8	13.18 p<.05

*された・した:df=4, 傍観・制止:df=5

表 2. 女子における運動部員と非運動部員の差 (運動部/非運動部): %

	未回答	ぜんぜんない	1-2回程度	月2-3回	週1回程度	週に何度も	χ^2 値
された 仲間はずれ	-	57.8/60.7	27.9/24.2	7.3/6.9	3.4/3.5	3.6/4.6	10.28 p<.05
された 金品被害	-	95.1/94.6	4.5/4.4	0.4/0.5	0.0/0.2	0.1/0.2	19.79 p<.01
した 仲間はずれ	-	48.0/54.8	33.7/28.8	10.6/8.4	4.4/3.8	3.3/4.1	29.54 p<.01
した からかい	-	71.7/76.6	19.4/15.4	4.8/4.6	2.5/1.4	1.6/2.0	23.74 p<.01
した ネットいじめ	-	97.4/97.1	2.2/2.1	0.3/0.3	0.0/0.1	0.0/0.3	11.25 p<.05
傍観 仲間はずれ	19.0/19.4	26.3/28.4	31.5/27.5	12.1/11.8	5.3/5.0	5.8/7.9	17.22 p<.01
傍観 からかい	22.5/22.4	36.4/37.5	23.9/20.5	8.2/8.2	3.7/4.0	5.2/7.2	15.38 p<.01
制止 仲間はずれ	30.3/31.2	38.5/41.7	24.1/20.3	4.5/4.2	1.4/1.8	1.2/0.8	15.01 p<.01
制止 からかい	34.3/34.8	40.1/43.1	19.2/16.2	3.9/3.2	1.3/1.8	1.2/0.8	15.47 p<.01

*された・した:df=4, 傍観・制止:df=5

男子を見てみると「した」の仲間はずれ、からかい、軽度の暴力で運動部の経験者が多いことが分かる。しかし、そのほとんどは 1-2 回程度という低頻度で、継続して攻撃した高頻度の者が多いとはいえない。4 つの態様の傍観からは、「週に何度も」という常習的な傍観者は、運動部員で若干少ない。また暴力の制止は低頻度ながら運動部員が多く経験していた。女子では仲間はずれを数度されたものは運動部員にやや多く、仲間はずれやからかいをしてしまった者も運動部員に数% 多かった。また男子同様、常習的な傍観者は少なく制止経験者はやや多かった。

次に、6 つの態様で週 1 回以上の被害を受けた者の割合を、運動部員、文化系部員、部活無所属の 3 群で比較してみた (表 3、4)。

表 3. 男子における週 1 回以上の被害者の部活動所属 (%)

	(人数)	運動部	文化部	無所属
男子	(5 1 8 6)	78.0	15.1	6.9
仲間	(3 0 2)	78.5	15.6	6.0
からかい	(6 1 8)	75.6	18.9	5.5
軽暴力	(4 8 3)	78.1	13.9	8.0
重暴力	(2 1 4)	79.4	12.6	7.9
金品	(6 0)	68.3	18.3	13.3
ネット	(4 6)	73.9	13.0	13.0

表 4. 女子における週 1 回以上の被害者の部活動所属 (%)

	(人数)	運動部	文化部	無所属
女子	(4 9 8 9)	57.4	36.6	6.0
仲間	(3 7 6)	53.5	43.6	2.9
からかい	(4 4 7)	55.5	40.5	4.0
軽暴力	(1 3 8)	52.2	40.6	7.2
重暴力	(5 4)	48.1	42.6	9.3
金品	(1 2)	16.7	83.3	0.0
ネット	(3 8)	55.3	39.5	5.3

各表の最初の行は全体での人数分布で、その%を上回ると、週一回以上という継続的な被害者の割合が多い群となる。

男女とも運動部員が全体での割合を大きく上回るものはなく、男女の金品や女子の重度の暴力では、運動部の被害者は少ないことが分かった。また、金品の被害者は文化系部員や無所属生徒で頻発する傾向がみられる。つまり、ここからいじめの被害者は部活動所属に関係なく、運動部員だから被害が多い、また反対に運動部員は被害を受けにくいということはいずれも支持されなかった。

表 5. はサポート行動の比較である。男女とも運動部員の方が、いじめられている者に対して何らかのサポートを経験した頻度が高くなっていることが分かる。

表 5. サポート行動の差異 (運動部/非運動部): % 太字: 残差絶対値 1.96 以上

		未回答	あり	なし	χ^2 値 (df=2)
あいさつ・声かけ	男子	11.5 / 14.2	44.0 / 38.1	44.5 / 47.7	14.39 $p < .01$
	女子	12.7 / 13.8	50.9 / 46.2	36.4 / 40.0	10.82 $p < .01$
慰め・励まし	男子	11.8 / 14.1	39.3 / 34.6	48.9 / 51.3	10.10 $p < .01$
相談・アドバイス	女子	12.3 / 13.8	39.0 / 35.8	48.7 / 50.4	5.92 $p < .05$

最後に、第 2 学期中に月に 2-3 回以上暴力被害を受けた経験がある者に、その相手、機

会、場所を問うた結果が表 6、7 である。複数回答の上位 6 つを掲載しており、括弧内は何%の者が選択したかを示している。

表 6. 男子にける 2-3 回以上/月の暴力被害経験の詳細 (%: 回答者の割合) N=732 (運動部 574・文化部 105・無所属 53)

	相手(だれに)	時間(いつ)	場所(どこで)
1位	クラスメイト同性(81.4)	休み時間・放課(85.0)	教室(76.5)
2位	他クラスの同性(36.7)	給食・昼休み(20.2)	廊下・階段(35.9)
3位	同じ部活の同級生(23.3)	部活動(19.5)	体育館(9.8)
4位	同じ部活動の先輩(7.5)	授業中(12.5)	トイレ(9.2)
5位	クラスメイト異性(7.2)	登下校(8.0)	グラウンド(8.8)
6位	部活以外の学校先輩(4.6)	その他(8.0)	通学路(6.4)

表 7. 女子にける 2-3 回以上/月の暴力被害経験の詳細 (%: 回答者の割合) N=284(運動部 152・文化部 113・無所属 19)

	相手(だれに)	時間(いつ)	場所(どこで)
1位	クラスメイト同性(53.6)	休み時間・放課(85.3)	教室(76.9)
2位	クラスメイト異性(47.6)	給食・昼休み(24.5)	廊下・階段(35.6)
3位	他クラスの同性(25.1)	部活動(21.1)	体育館(11.7)
4位	同じ部活の同級生(21.3)	登下校(13.6)	通学路(11.0)
5位	他クラス異性(16.5)	授業中(12.5)	部室(8.3)
6位	同じ塾の人(4.9)	その他(6.0)	下駄箱(6.4)

やられた相手の 1 位は男女とも同じクラスの同性だが、男子では 8 割を超えているが女子では約半数で、2 位に男子は他クラス同性、女子は同じクラスの男子となっている。部活動関連では、男子で部活の同級生と先輩が 3、4 位、女子では 4 位に部活の同級生が位置している。いつ被害を受けているかという機会では、男女とも 3 位で約 20%の者が部活での被害を経験している。場所でも、男子で体育館とグラウンド、女子で体育館と部室が約 10%の者から選択されている。これらを総括すると、いじめの発生は、授業や休み時間の正課中のクラスが主たる場になっているが、運動部員にとっては、運動部活動の前後を含む時間帯で部員内での暴力によるいじめが発生していることが推測される。

結論

本研究では全 31 校の中学生約 1 万名にいじめの現状を調査できたが、調査依頼の過程で調査用紙の中に「いじめ」の用語を使わないことや、属性データの制限があった。また、自己報告式アンケート調査による回答の信頼性に限界があることは否めない。

運動部員の有無による比較を行った結果

からは、運動部員がいじめの被害や加害を多く経験しているという事実は認められなかった。つまり、運動部活動がいじめの発生や悪化を助長しているとは言えない。さらに、いじめを制止した経験がある者は、運動部員に多い傾向が見られた。また、被害を受けている者に対して声をかけたり相談にのったりするサポート行動は、運動部員の方が経験の割合が高く、運動部活動はいじめのサポートを生起する側面もみられた。

しかし、暴力が生起している場所や相手などの状況からは、部活動が暴力被害を受ける場の一つになっていることが分かった。もし、教室でのいじめと部活動でのいじめが並行してなされた場合、被害者にとっては学校全体がいじめの場になってしまう。また、高見(2016)は中学生の運動参加の主要な動機が「体力、技能を向上する」「自分を強くする」ことであることを報告しているが、このような自己の向上や研鑽を目的として自主的に参加した仲間集団からの拒絶やいじめが与える悪影響の深刻さを認識する必要がある。高田⁹⁾は部活動での人間関係のトラブルから不登校に至った複数の症例を報告している。海外でもスポーツ活動での仲間の拒絶(peer rejection)やいじめが、成人以後も続く精神疾患や、犯罪(例:1999年米国コロンバイン高校での生徒による銃乱射事件)の原因になる危険性が指摘されている(Hickey, 2003)。冒頭の中学生の自死の調査報告書における運動部活動に関する記述も、運動部活動が有する精神的な影響力の強さを反映するものである。

一方、いじめの発生を防止する方法として、被害者、加害者個々への対応ではない集団へのアプローチが注目されている(松尾, 2002)。なかでも大西(2008)は中学生のいじめに否定的な集団規範づくりの有効性を指摘している。もし、クラスよりも小規模で一般的に集団凝集性が強い運動部活動においていじめを容認しない規範や態度を生徒に身に付けさせることができれば、それがクラスや学校全体に波及することが期待される。運動部活動は、中学校におけるいじめ防止の具体的な効果的な手段にもなる可能性を有していると考えられる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

高見和至、中学生における“いじめ”に関する行動の諸相:「された」「した」「傍観」「制止」「サポート」の行動頻度と関連、学校メンタルヘルス、査読有、18巻、第2号、2016、未定

[学会発表](計3件)

高見和至、中学生における“いじめ”に関する行動の諸相 - 第2学期中に体験した「された」「した」「傍観」「制止」「サポート」の行動頻度 -、日本心理学

会第79回大会、2015.9.23、名古屋国際会議場(愛知県)

高見和至、中学生におけるいじめの発生と運動部活動 - いじめに関する行動頻度の運動部所属の有無による比較 -、日本体育学会第66回大会、2015.8.26、国士舘大学(東京都)

石黒由美子、高見和至、日本の中学生におけるいじめに関する行動、第13回ヨーロッパ心理学会、2013.7.12、ストックホルム(スウェーデン)

6. 研究組織

(1)研究代表者

高見和至(TAKAMI, Kazushi)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科
・教授

研究者番号: 50236353